



# 新農政改革を づくりに使わずして

# どうする

産業競争力会議やら規制改革会議やらの強い意志でつくられた農地中間管理機構。明らかに農地を「市場経済に巻き込む」ことが目的だったようだが、農村側は「人・農地プラン」を盾に、地域の意見が優先されるしくみをつくってうまくかわした。ここから先は、地域自身の運営力が試される。動き始めた現場はまだ少ないが、今号はまず第1報をお届けする。



熊本県高森町草部地区の棚田。今年、地域ぐるみで農地中間管理機構を利用するつもりだ

# 地域

## 中山間の美しいむらも使う

# 農地中間管理機構

熊本県高森町・草部南部地区くさかべ

熊本県は、今年3月に（公財）熊本県農業公社を「農地中間管理機構」に指定。

4月にはモデル地区3カ所で借り受け希望者の公募を実施した。そのひとつが、高森町草部南部地区だ。

「機構を使う予定」という、その現場に向かった。

文・写真 | 編集部

**き** れいなむらだ。水を張った田はキラキラ光り、畦畔の草刈りも行き届いている。タバコや露地野菜の畑、気持ちよさそうに放牧されている赤牛、中山間地域なのに結構大きなハウスが現れたりもする。

モデル地区になった草部南部地区はかつての小学校区。牧草地や畑も含めた総農地面積は約420haで農家戸数は200戸ほどだ。棚田での水稲が主だが、各農家が経営を工夫しながら農地と地域を維持してきた。親戚間や近所同士で助け合い程度の作業受委託はあったが、集落営農も、機械の共同利用もない。

**いま、地域で話し合えてよかった**

「これからも田んぼの管理ができない人がどんどん出てくるのは目に見えてましたよ」と担い手農家のひとり、佐橋見眞一さん